

専門分野: 科学史(博物学史、気象学史)、科学技術社会論、博物館学
テーマ: **博物館は公衆と語り合う最前線(古臭くない!)**

【授業の主旨・目的】

博物館は、収蔵品を並べているだけではなく、学芸員が、見る人に問いを投げかけ、ともに語り合う場でもあります。演習では、アメリカの博物館/展示をとおり、博物館と社会文化との関わりを深く考察します。

アメリカの都市や田舎を歩くと、至る所で博物館に遭遇する。たとえばシカゴのオヘア国際空港ではフィールド自然史博物館の巨大なブラキオサウルス骨格標本が屹立する。博物館は非営利団体、営利団体、大学、あらゆるレベルの政府(連邦政府、州政府、市町村、郡など)によって運営されている。博物館は運営形態から内容まで、実に多様であり、気軽に出かけて知的冒険を楽しむ人気の場所となっている。博物館入館者は毎年約8億5千万人おり、これは、野球などのメジャーリーグ全てのスポーツ行事とテーマパークを合わせた入場者より多いほどである。アメリカ博物館協会によれば、博物館はまた、大学の研究者や教授を抑えて、もっとも信頼できる情報源としても認識されている。ものを見て世界の驚異に触れ、知識を増やすというアメリカの博物館文化は、見ることに對するアメリカの人々の思い入れの深さを物語る。自然史、人類学、科学技術、自然センター、樹木園・植物園、動物園、水族館、プラネタリウムなどの科学技術の博物館や科学センターについても、アメリカ人は他国の人より頻繁に行くと言われる。(中略)2009年にヒットした映画《ナイト ミュージアム 2》は、原題に《Night at the Museum: Battle of the Smithsonian》とあるように、スミソニアン協会が舞台となった(同シリーズ1作目の舞台はニューヨークのアメリカ自然史博物館)。

参考文献:

財部香枝「博物館」『アメリカ文化事典』丸善出版、2018:326-327.

財部香枝「スミソニアン協会による科学の可視化戦略:長官ウェイン・クラフの挑戦」『アリーナ』第22号、2019:483-94.

【授業計画】

20以上の博物館・美術館、動物園および9箇所の研究所からなる、世界最大の博物館・研究所群であるスミソニアン協会(本部はアメリカ、ワシントン DC)の展示(歴代ファーストレディのガウン、ホープダイヤモンド、ティラノサウルス、火星探査機...)を題材に、何気なく見ている展示の裏にある社会的文化的背景を理解します。担当者の発表後、全員で討論します。要望があれば、実際に博物館を訪れる機会を持ちます。

【評価方法】 発表・討論への「参加」および課題の取り組みを、総合的に判断します。

【教科書】 使用しません。

【面談に際しての注意事項】 最初の4回は面談希望者向け合同説明会となります。必ず参加しましょう。5回目以降はポートフォリオを確認しながら個人面談を行うので、それまでにポートフォリオを充実させておくこととよいでしょう。面談にあたって予約の必要はありません。

